

第4回（2009年度第1回）ピアスーパービジョン報告

ピアスーパービジョンとは、社会福祉の現場で実践を行っている者同士が「振り返り・語り合い・支えあう」支援を行うことを意味しています。

昨年10月10日（土）に、2009年度第1回ピアスーパービジョンが聖学院大学を会場に35名の参加者を迎えて開催されました。人間福祉学科の卒業生、現場で働いている外部の方だけでなく、現役の学科の学生さんも参加して行われました。

開催にあたり、牛津信忠先生（人間福祉学科長・人間福祉スーパービジョンセンター実行委員長）から挨拶がありました。漢詩の「真理は寒梅の如し、敢えて風雪を侵して開く」の一節を引用し、「人間福祉学科の一期生が入学し、11年の歳月が流れようとしている。その間、アメリカのオバマ政権の誕生や（日本では）政権交代などがあった。世の中の変化は著しい。そのなかにあって、福祉の現場に置かれた状況は依然として変わらず、厳しいのが現状である。そのなかで私たちに必要なのは、心の深いところでもともに希望を持って臨んでいくことなのではないだろうか」とお話を結ばれました。



助川征雄先生による講演司会の進行



牛津信忠先生の開会の挨拶

開会の挨拶あと、柏木昭先生（大学院人間福祉学研究科教授・スーパーバイザー）による「スーパービジョンとはなにか」というテーマで講演が行われました。長年のスーパービジョンに基づく経験から、「スーパービジョンはスーパーバイザーとスーパーバイジーとの間で定期的に一定期間、スーパーバイジーの利用者へのサービス、“かかわり”について自ら考えて、試行錯誤し、主体的になれるように手伝っていく力動的過程と定義付けることができる。その過程ではスーパーバイジーが自己開示できる関係をつくるのがポイントになる。」と述べられました。そのうえで、“かかわり”とは「利用者本人が『この人は私の話をちゃんと聴いてくれているのだ』と確信が持てるように、

利用者の話にきちんと耳を傾けていくこと（傾聴）にある。その意味において、相互に主体的な関係であり、依存的な関係ではない。課題を利用者と共有しようとする立ち位置において、自らの気づきや思いを相手に伝えていく必要がある。利用者に同行者として寄り添っていくことによってソーシャルワーカー独自の専門性が発揮され、周囲のスタッフのみならず、利用者への信頼と評価にもつながっていく」と述べられました。参加者はそれぞれに先生のお話に静かに耳を傾けていました。先生は、講演のなかでスーパービジョンセンターの果たす役割についても触れ、「聖学院大学にスーパービジョンセンターができたのは、自らの葛藤を自覚して主体的に仕事に取り組むことのできるソーシャルワーカーを育てるためであり、大変、先駆的な意味を持っている」との思いを寄せられました。



柏木昭先生による講演



講演に耳を傾ける参加者



熱心にメモをとる！

次に田村綾子先生（社団法人日本精神保健福祉士協会常任理事・研修センター長・スーパーバイザー）より、「スーパービジョンの実際について」と題した講演が行われました。田村先生はパワーポイントを使いながら、スーパービジョンの活用方法について、実際の事例を挙げながら丁寧に整理してお話してくださいました。スーパービジョンを受けることによって、実際にどのような形でソーシャルワーカーが自らの援助を振り返っていくこととなるのか。一連のプロセスを辿っていくものでした。参加者一同、共感を持って聴くことのできる内容となったように思われます。田村先生は、スーパービジョンを「自分がしっかり学ぼう、成長したいという気持ちを保持していくために必要な“出会いの場”である」と位置付けられました。そして、さいごに、①「ソーシャルワーカーであり続けるために」②「先輩や仲間を作り、語り合しましょう」③「いずれは、後輩へのお返しもしたいですね」という3つのキーワードを挙げて、講演を結ばれました。



講演される田村綾子先生



田村先生のお話に聴き入っている参加者

田村先生の講演を受けて、休憩のあとに4つのグループに分かれて、グループディスカッションが行われました。(1つのグループで7、8名程度)。今回は、それぞれ経験年数ごとに分かれたグループのなかで行われたこともあり、限られた短い時間ではありましたが、参加者ひとり一人が自分たちの現場で働いていて感じていること(悩み、思い、失敗、葛藤、とまどい、希望など)について自由に語り合うことができましたようです。参加者がそれぞれに自分の思いを語るだけでなく、各自の班のメンバーの言葉に共感を持って、傾聴している姿がそこにはありました。



グループに分かれての語り合いの様子：みんなそれぞれに語り合っています↑

ここまでの流れを受けて、交流会を兼ねた形で牛津先生、柏木先生、田村先生、助川先生によるグループディスカッションへの感想が寄せられました。4人先生方それぞれに、4つグループの発表から出てきたコメントをピックアップされ、温かい励ましの言葉をいただくことができました。グループ発表では、それぞれの班ごとで出た意見や思いが発表されました。今回は、経験年数に応じた班の構成による発表が行われました。おもに「職場の人間関係」や「仕事への不安と悩み」、「職場での人材不足」が中心となりましたが、なかには「障害者自立支援法」(2010年3月現在、鳩山政権下では廃案の方針が打ち出されています)に対する現場での土言い・怒りの声を挙げる班もありました。交流会から人間福祉学部長の中村磐男先生も駆け付けくださり、参加している卒業生に向けて、エールを送っていただきました。



それぞれの先生方によるコメント



中村先生も駆けつけてくださいました



最後は助川先生によるコメントで閉会

福祉現場に入った卒業生のなかにはすでに管理職に就いている者もあり、スーパービジョンの体制が体系化されていない職場環境のなかで、後輩への指導・アドバイスの仕方に悩む人もいます。なかには燃え尽きて、離職する者も少なくありません。そういった現実のなかで、先生方のコメントを通じて、「“集うこと”の大切さ”を感じとることができたように思います。同じ学科の卒業生であり、同じ志を持って働く仲間同士だからこそ、ともに思いや悩みを共有することのできる場がここ（SEIG）にはあるのかもしれない。なによりも「ここに話すことのできる場がある!」という安心感が持てること。そのことがまず、大切なことなのかもしれません。田村先生から「自分以外にもがんばっている仲間がいることを憶えてほしい」というコメントが寄せられました。まさに、この言葉がぴったりと当てはまるように思います。

当日は 18 時半から大宮で、人間福祉学科の卒業生有志による懇親会も同時に開催されました。学科の先生方も交えて行われました。懇親会から参加した人も多く、あらためて絆を深める楽しく、にぎやかなひとときとなりました（参加者：総勢 30 名ほど）。懇親会は PSV のプログラムの延長という視点から考えてみても、参加者同士の関係を相互に深めていく意味で、十分な効果があることを実感しました。「仕事の都合上、時間がとれず、ピアスーパービジョンにはなかなか参加できないが、懇親会には参加したい」という声多くも寄せられています。夕方からの懇親会は今後とも開催していきたいと思えます。

今回のピアスーパービジョンを通じて、一連のプログラムが SEIG WELFARE NET（聖学院大学人間福祉学科の卒業生と SVC の受講者を中心とした福祉実践家のネットワーク）に集う人たち、さらには当日、参加したひとたちにとっても個々のネットワークを広げていくための“きっかけづくり”や“情報交換の場”となっていることを感じます。ここで得た“つながり（絆）”を今後どのような形で継続し、これからのピアスーパービジョンのなかで活かしていくのか。参加した人それぞれに問われている課題のように思われます。